



健康会だより

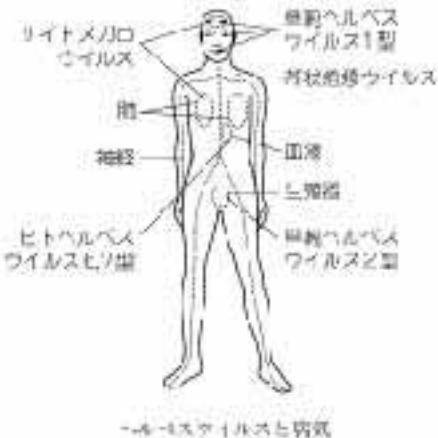
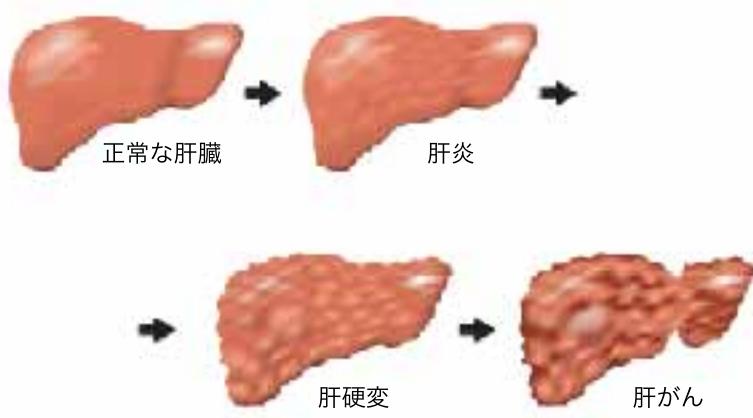
<主旨と理念>

長谷部式健康会は『自分の健康は自分の努力で』をスローガンに健康普及活動をしている会です。健康は人生最高の宝です。世界人類の健康と平和に奉仕しましょう。『体質別』は健康を守る自然の法則です。

発行所 長谷部式健康会 総本部
〒491-0905 愛知県一宮市平和1-2-13
発行人 長谷部茂人
発行部数 3000部
tel 0586-46-1258
fax 0586-46-0367
E-mail kenko@world.interq.or.jp
http://www.interq.or.jp/world/kenko/

がんのウイルス発生説

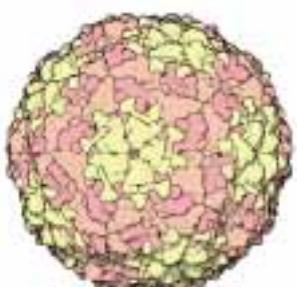
あなたの体もウイルスの潜伏を許している



口蹄疫は一過性か？

2010年3月宮崎県都農町において家畜伝染病予防法で定める口蹄疫が疑われる牛が見つかりました。法律では感染が確認された場合、他の家畜への感染拡大を防ぐため罹患した患畜は殺処分されることになっています。

その後、感染状況が詳らかになるにつれて、国連食糧農業機関(FAO)からも今回の口蹄疫流行は世界的にみても過去10年間では最大規模の発生として、日本政府に感染防止対策を徹底するよう要求されました。最初の発見から3ヶ月が経過した現在、ワクチン接種家畜(牛、豚)を含めた殺処分対象家畜は28万頭を超えています。



口蹄疫ウイルス(直径は21~25ナノメートル)

口蹄疫は口蹄疫ウイルスが原因で起こる病気とされます。さて、そのウイルスは一体どこから紛れ込んできたのでしょうか？

一部週刊誌の報道によると、中国から輸入した稻ワラ

ホームページ <http://biwahonpo.jp/>

が口蹄疫ウイルスで汚染されていたのではないかといいます。いや、今年1月に韓国で口蹄疫が流行しているので、距離的にみてもそちらのウイルスが飛来したに違いないという意見もあります。

動物衛生研究所によるDNAの分析結果では、宮崎の口蹄疫ウイルスと中国のウイルスは99.22%、韓国とは98.59%の遺伝子が一致したといいます。「99%」と聞くと、私たちは「ほぼ」というふうに受け取りがちです。しかし、中国のウイルスとは0.78%、韓国のは1.41%遺伝子レベルで違っているのであって、その1%前後の違いがどの程度一致を裏付けるのか、保証の限りではないと思います。

そういえば昨年の今頃、新型インフルエンザの話題で日本中持ちきりでした。9千万人分のワクチンを緊急輸入して、半分使ったのか、使わなかったのか、あの話はどこへいったのでしょうか。それとも一年が経過したので、新型から流行性と呼び名を変えただけなのでしょうか？この頃、街を歩く人たちにマスク姿を見かけることがなりました。新型インフルエンザはもう消えてなくなつたのでしょうか。

ウイルス性疾患は騒がせになるだけの一過性の出来事、時間がきれいに流してしまうということでしょうか？

ウイルスの実態

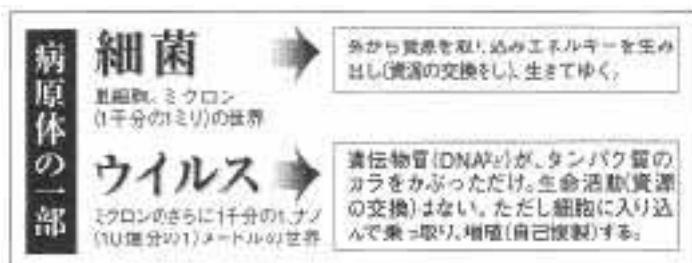
これまでに発見されているウイルスは100種類以上もあります。ヒトを自然宿主とするヘルペスウイルスだけでも8種類。疲れたときなど、口の周りにできる発疹(口唇ヘルペス)は単純ヘルペス1型、臓器移植の際に問題になるサイトロメガウイルス、年をとつてから悩まされるようになる帶状疱疹ウイルスなどです。

これらヘルペスウイルスは、実はどこにでもいるウイルスで、ほとんどの人がすでに感染しているとみられています。健康なときは免疫力で抑えられて何も起こらない。夜更かしして体力が低下していたり、海や山で強い陽射しを浴びたりすると、ヘルペスウイルスは活動を始めます。また臓器移植などで免疫抑制剤を使うと、しばしば陰を潜めていたサイトロメガウイルスが暴れだすこともある。(『したたかなウイルスたち』生田和良著より引用)

ウイルスは様々な点で他の生物と大きく異なります。その違いは、「非細胞性で細胞質などは持たない」、「ウイルス粒子が見かけ上消えてしまう暗黒期が存在する」、「自分自身でエネルギーを產生せず、宿主細胞の作るエネルギーを利用する」など。

また生物の定義「自己増殖能力を有す」に当てはまらないことから、非生物ともいわれています。

ウイルス自体の大きさは、宿主細胞の1000分の1以下(細胞はミクロン[千分の1mm]の単位、ウイルスはナノ[100万分の1mm]の単位)で、例えていうならば大きなバスタブと蟻ほどの違いになります。



ウイルスでがんになる！？

1955年～1963年にアメリカでポリオワクチンの接種が9800万人に行われました。そのポリオワクチンの62%に、サルを宿主とするポリオーマウイルスSimian virus (SV40)が混入していました。ポリオウイルスを封じ込むために使った薬剤が、別のウイルスに汚染されていたということです。

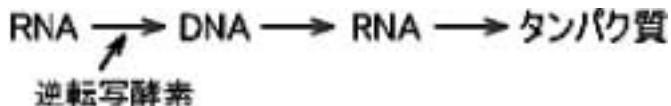
過去、アメリカでの疫学調査によると、脳腫瘍、前立腺ガン、悪性リンパ腫、アスベストが原因であるとされる中皮腫の約半数に、このウイルスが確認されたといいます。シカゴのロヨラ大学の病理学助教授であるマイケル・カーボーンは、人間の骨のガンとメソテリオマス(中皮腫)

の中からSV-40の断片を分離することに成功。イタリアのフェラーラ大学のフェルナンダ・マルチーニ博士が率いる調査チームは、多くの脳腫瘍にこのSV-40を発見しました。(『ミクロの侵入者、ワクチンに潜むガンウイルス』横山逸男著より引用)

日本人の成人は、先述のヘルペスウイルスの一種であるEBウイルスに、ほぼ100%の人が感染しているといわれています。EBウイルスは、Bリンパ球を腫瘍化するバーキットリンパ腫、未分化扁平上皮がんである上咽頭がんの原因ともなっています。エイズ患者によくみられるカボジ肉腫もヘルペスウイルスHHV-8が原因とみられています。

このように書くと、ウイルスは悪の権化のように聞こえてしまいますが、今花形の遺伝子治療やIps細胞などの新技術もウイルスを使っています。遺伝子の運び屋であるベクターに、逆転写酵素を持つレトロウイルスを用いているそうです。ここでも「逆転写」というのが、技術と病気の両方に働いてしまうことがわかっています。下の図は、悪い方、発がんにはたらくメカニズムです。

(逆転写酵素の作用機序)



(がん遺伝子化されるレトロウイルス)



話題になりやすいウイルス関与のがん

発がんは、細胞の遺伝子にキズが付くことから始まるといいます。度重なる刺激、消化器のがんならば、飲食物の刺激、例えばアルコールや塩素、ピリカラする食べ物、やけどしそうなぐらいに熱いお茶や燗酒、腸内悪玉菌を増やす高脂質、高カロリー食品などが発がんと関係しているといえます。

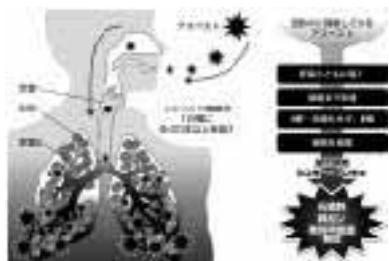
しかし、肝臓、腎臓、膀胱、脾臓、肺などの発がんはどうでしょうか？意図した刺激物って何がありますか？

ここで、最近よく話題にあがりやすいがん情報を三つあげてみましょう。

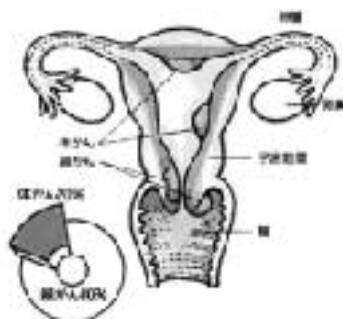
中皮腫を起しやすいアスベスト肺症。実は、アスベスト自身に発がん性は低く、外からのウイルス侵入によって発がんを高めている可能性が高い(先出『ミクロの侵入者、ワクチンに潜むガンウイルス』横山逸男著より)といいます。



アスベストは1970年以前の高度成長期に、家屋の断熱、耐火材として広く用いられた。



昨年、厚生労働省の認可が下りた子宮頸がんを予防するワクチン。ワクチンということは、ウイルスに対するものということですね。子宮頸がんの8~9割は、ウイルスが原因と考えられています。かつては単純ヘルペス2型との関連性が疑われていましたが、今日ではヒトパピローマウイルスが原因であることがわかっています。このヒトパピローマウイルスはおよそ性交渉によって感染し、ほとんどの女性が感染履歴を有すると考えられているのです。



日本人に多い子宮頸がん。欧米では子宮がんといえば子宮体がんを指すことが多い。

肝がんの9割は肝細胞がん。ハッキリしていることは、そのほとんどはC型肝炎ウイルスまたはB型肝炎ウイルスが原因なのです(表紙挿絵参照)。

これらのウイルスが臓器組織の粘膜を攻撃します。ウイルスは先ほどの刺激に代わるもの、いやそれ以上の脅威です。

がん患者に時々見かけるイボ、帯状疱疹の病歴もウイルスによるものです。

がんとは?
遺伝子は細胞の設計図です。
遺伝子によって細胞が正しくコピーされる。
何かの原因によって遺伝子に傷がつくと…

異常細胞=がん細胞の発生



交通事故やスポーツで怪我をしたとします。外傷部分は大きく遺伝子にキズを受けますが、そこがいざがんになるというわけではありません。「遺伝子にキズ」、ウイルスによる発がんをもっと強く疑うべきではないでしょうか。

今日では全がんの15~20%が何らかのウイルスに関係しているといわれます。「何らか」というならば、日本人のほぼ100%がヘルペスなどのウイルスに感染歴があり、暗黒期のあるウイルスは何十年も人の体の中で潜伏しています。発がんと関係あるウイルス、ないウイルス、見解は様々ですが、ウイルスによる発症が「日和見(ひよりみ)的」であるのも事実です。日本人全員が、ウイルスによるがん予備軍と思っても間違いではありません。

ウイルスは熱に弱い

風邪やインフルエンザに罹ると、私たちは発熱します。同時に、体がだるくなり、頭はふらふらして横になって安静にしていたくなります。体が風邪やインフルエンザのウイルスと戦っている時は、ゆっくり休むことと発熱が治療になっているのです。

私たちの体の中には、様々な化学的反応を助ける酵素が1万種類ほどあるといわれます。それらの酵素が活発に働きやすい温度が38度~40度。つまり、「熱が出た」と感じる時の体温です。酵素で体が活発に作業しているときは、処理物質もたくさん出る。なので、作業に特化しているときは、他の余分なことは控えなければなりません。つまり、横になって寝ているのが一番なのです。

一般的にウイルスは熱に弱い、あるいは低体温で増殖するといわれます。動物は病気になった時、温かな場所を好みます。体温を上げて自己治療しているのです。

ウイルスをやっつけるためには、体温が高目の適度になっていることが望されます。但し、熱が体に大きな負担をかけないことが条件です。その点で個人差、体质別の対応が必要になってきます。

家畜牛の場合、口蹄疫ウイルスに罹ると「治らない」を先に決め、直ちに殺処分されてしまう。
人間は蹄(ひづめ)がなくてよかったです…!?

ウイルスが棲みつきにくい
体づくりに努めましょう!



新刊書『隠された造血幹細胞の秘密』酒向 猛(セントマーガレット病院外科、医学博士)著
副題は「腸管造血説と幻の造血幹細胞」となっています。腸管造血説が造血幹細胞のどこと関係しているのか?専門家でも難題・怪奇なテーマを、これだけキチンと説明している本も珍しい。解かっていそうで解かっていないことを切り口に、現代医学の不完全性をあぶりだす。本文の一部を見てみよう。



健康人の血液中の赤血球は約500万/mm³である。血液の量は体重の約8%であり、体重が50kgの人では総血液量は約4000mlとなる。よって血液中を流れている赤血球の総数は約 2.0×10^{13} 個すなわち20兆個という膨大な数となる。ヒトの赤血球の寿命は約120日であることがわかっているので、一日で20兆個の120分の1、すなわち1700億個が毎日産生されている計算になる。骨髄の容積は体重の約4%で、体重が50kgの人であれば骨髄液の量は約2000mlとなる。ところが、日本の血液学の権威者小宮正文が著した医学の教科書『骨髄細胞アトラス』では…毎日産生されている血球の数に対して計算上かなり少ないとと思わざるを得ない。…この点について小宮も矛盾を認めており、このように書いている。「実測する際、血液や細胞間液で希釈された状態を観察しているからであろう」。

私の医師としての臨床経験でも、骨髄穿刺の操作中に、骨髄液中に他の血液が多少混入する可能性はあると思う。しかし採取した骨髄液が他の血液や体液によって倍以上に薄まるなどということは、到底考えられない。



NPO法人日本ホリスティック医学協会主催「ホリスティック医学シンポジウム2010」(11月14日) 東京都千代田区永田町

今年のシンポジウムは映画「地球交響曲第7番」(龍村仁監督)がフューチャリングされて、医療統合の潮流がつかめる企画になっている。この映画のメインキャストに統合医療の世界的権威で、当該協会の顧問でもあるアリゾナ大学医学部教授アンドルー・ワイル博士が出演されている。日本で活躍するワイルチルドレンの医師たちも参集する。もちろん協会長の帶津良一氏、ワイル博士の著書翻訳でも知られる上野圭一氏、この映画の監督である龍村仁氏がセッションするプログラムも用意されている。詳細は協会ホームページ、または私のところに連絡いただいても案内します。



●申込み・問合せ先 〒491-0905 愛知県一宮市平和1-2-13 長谷部式健康会

TEL 0586-46-1258 FAX 0586-46-0367 E-mail kenko@world.interq.or.jp